

陸、六二〇人、計一〇〇三人。

復員列車で福岡、久留米―西鉄駅まで歩いて、西鉄よりミツマまでは蒸気機関車で帰った。

家に帰って、兄弟の五人は軍人で、皆帰って来たが、その中で私は昭和二十一年四月の帰還だったので遅い方であった。父母はその時は丈夫だった。家も焼けずに大丈夫であった。帰還後は農業をやり、昭和二十三年に八山家の養子になり、農地を買い求めて、現在一町八反、米麦耕作であるから、子供は勤め人となり町の農協に勤め、子供夫婦と孫五人で農業をしている。

農業年金受給者協会の会長を四年間、その後、町の会長をしている。いろいろの名誉職等、健康のためになる公務をしている。県・町の会長も十、二十三年勤めている。

痛感することは、戦争の時代は産めよ、増やせよ、今は子供を持たぬ者も多い。これは、日本の将来によくないことと心配している。

湘桂作戦に

苦闘した兵たち

福島県 若林 保

歩兵第六十五連隊は、明治四十一年（一九〇八）年六月二十六日、若松新兵営に入り、大正十四年（一九二五）年一月二十七日軍備縮小により廃止され、昭和十二年（一九三七）年九月十八日、両角大佐を長として再編成された。両角・立花・桜井・伊藤・服部と隊長変遷を歩み、上海戦以来、湘桂反転作戦に至るまで四八八一人の戦死者を出した。

私は桜井部隊の時に入隊、伊藤・服部と三代にわたり従軍、終戦を迎える。この間、昭和十七年十二月一日より再び祖国の土を踏んだ昭和二十一年六月二十三日までの五カ年にわたる丸三年七カ月、祖国を離れて戦場にて青春を過ごした。

幾度、男泣きをしたことか、戦友と語り戦友と苦しみ、果ては異郷の地に戦い、死して犬猫のごとく野たれ死にとなるのが戦場の姿である。名譽の戦死、壮烈なる戦死等と決まり文句は美化した文句である。

湘桂作戦は大本營と派遣軍が命運を賭けて発動した建軍以来最大規模の作戦である。

昭和十八年四月上旬、沙市の対岸揚子江（長江）の中流を渡河した二〇メートル上流地点に駐留後、昭和十九年四月中旬、いずれの戦地に行くのやら兵は知らず、部隊は行動を開始した。南方の島々に行くとか、本土防衛軍に加わるとか兵は思い思いに話を交しながら黙々と目的地向かって毎日の進軍が続く。

中国大陸の野にも春が来た。田植の季節である。農夫が田植の準備にせつせと働く長閑な風景が見られる。一カ月後に天地を揺るがす日本軍五一万、中国軍三百万の両軍が激突することも露知

らず、ゆつたりとした農村風景の中を兵は黙々と進む。

疲れた兵士にとって何よりの御馳走は瓶風呂だ。分隊毎に大瓶を見つけ、大鍋で湯を沸かし、水と湯を入れて程よくして浸かる。

月光こうこうと戦場を照らし、静かな夜の一時。

『月おば眺めて瓶風呂で……』

唸る戦友の横顔を……』

と哀愁切々、白河市出身の佐藤善男戦友の歌声は四十年を経た今もなお、青春兵士のそのままの姿が想起される。大陸の天地ひとしお青い。彼は二カ月後の六月十六日、金魚右にて戦死することを神ならぬ身の知る由もない。私と同分隊の気の合った戦友であり、私より四カ月前に入隊した先輩であったが同年兵のごとく親しくしてくれた。

私の復員後、彼の両親より本当に戦死したのかどうか問合せがあった。戦場に征き、その後四年も五年も故郷の肉親と連絡はなく、戦死の公報な

ど信じたくない、これが本音であろう。

五月中旬、湖南省岳州に到着す。進攻開始までの十余日間、敵情報の蒐集・進攻準備の部隊の集結等々である。兵士はここで初めていずれに征くのかを知る。

湘桂作戦（大陸打通作戦）は昭和十九年五月二十七日、「海軍記念日」の未明を期して開始された。梅雨に入った江南地区である。兵は死を決し完全武装でしとすと小雨降る中を、堰を切り雪崩のごとく敵陣に向かって進攻を開始した。

まず手合せに、分水嶺にて中国軍と交戦しつつ万洋山脈・八斗嶺を越えて蔣埠江の対岸に出る。

中国軍の重迫撃砲の集中攻撃にて身動きできず。松崎貞一軍曹（会津高田町出身）迫撃砲の直撃を受けて全身血達磨。彼は昭和十八年八月、一時帰還して新妻を迎えて三日間の新婚生活をしたと語る。故郷の妻は俺がこんな苦労していることを知らないだろうな、と冗談とも本心ともとれる

独り言のようなことをいいながら従軍した。彼は中隊随一の滑稽班長であり兵からも中国人苦力（カワリ）からも慕われた兵士である。誠に壮烈、鬼神も泣く戦死である。

蔣埠江は降り続く雨にて氾濫していた。工兵隊・重火機の援護による敵前渡河中、初年兵の藤田進一等兵が流れ死す。死体発見できず。中国軍、後退せず三日間の交戦である。

夜半、河向こうの山に登る。梅雨空にて漆黒の闇の中だ。中国軍の指揮官か山間にこだまするカ\nン高い声に交じり、仏法僧の声に似た名も知れぬ鳥の声が、深山幽谷の闇の中に不気味に聞こえる。

六月十六日、雨中の進軍、夕暮に金魚石という小さな集落に到着。この日は土砂降りの雨の中の進撃で、水田は水が溢れ、小路は川と化して流れていた。

平林大隊長は馬上から降り、鈴木中隊長と地図を広げて打合せしている。この山を越せば中国軍

の大部隊が集結している。分哨の位置が示された。我が第七中隊は尖兵中隊となり、進撃しつつ宿営地に着いたのである。第二小隊は平屋の民家である。直ちに東方の小山に登る分哨が伝達された。私は軽機射手として分哨長・中家玉夫伍長、擲弾筒手・鈴木勝正、弾薬手・四家清雄、軽機射手・若林保、弾薬手・佐藤善男、小銃手・丸山・草野以上七人。山に登る途中民家の家探しをし、私は鶏卵二個を見つけて鉄兜の中網に入れた。皆それぞれ何かを探したようだ。

中家伍長は軍の編成替えによって第六十五連隊に転属して来たばかりで、未だ中隊に馴染が薄かった。和歌山県出身と聞く。軍隊（運隊）は勤務割も、生も、死も、進級も、運、不運はつきものである。とにかく、東方小山の頂上に向かって登った。

頂上に達した時、瞬間驚いた。手頃な石二個を並べ、側には家鴨一羽位の羽毛が剥いであり、石

は黒焦げ、未だ下には火の粉が残り、家鴨を焼いて食べたあとらしい。我々一行は土民でも警戒していたのかと思ひ、別に本隊に連絡もしなかった。このようなことは到る所に存在する民兵が銃を持って警戒しているので珍しくないことであるが、この場合、正規軍の歩哨であったかも知れない。

空は曇っていたが雨は止み、夕暮の山頂はさわやかでしばし郷愁の思ひにかられた。左の山の下は川幅二〇〇メートルの滔々たる緑江がどす黒く、不気味な音をたてて流れていた。この日に限り銃声一つしない。無風状態の平穏な中にも何となく戦場、怪しげな黄昏時であった。夜半中国軍の大軍に密かに包囲されるとは、神ならぬ身の知る由もなかった。

我ら兵士は平然と歩哨についた。微発した卵をすすりながら故郷を偲び、空腹なる時は搗き立ての餅を腹いっぱい食べた話をし、咽を鳴らし、故

郷のお盆の季節である。盆踊りのことなど語りながら夕食の飯盒の到着を待つ。それが待てども待てども届かぬ。兵達は、イライラしだした。歩哨の夕食は忘れたのかと思うぐらいであった。

午後九時過ぎ、伊藤源七氏（福島市）を先頭に初年兵二人を連れて松明を灯して登って来た。

暗雲漂う闇の夜である。「御苦労さん、御苦労さん」「遅くなりました。早く食べて下さい」初年兵に届けさせたのだが、道が判らず戻ってしまったので、私が来ましたという。二人の初年兵は異口同音「分哨ご苦労様であります」という。時の過ぎた中国のラーメン、水気一つなくふくれるだけ、飯盒の蓋がとびあがっていたのだが空腹にまずい物なしと喜んで食べる。約二十分の食事の時間であるが思い思いの語らいの一時が楽しい。

前夜半は車座になって七人は語り合った。低い山で前夜来の雨と蒸し暑さと藪蚊の攻めにあう。びしょ濡れの上衣や靴下をしぼり、乾かして天幕

をかぶり眠る。午前三時ごろか密かに包囲網を縮めた中国軍は、立哨中の佐藤善男一等兵を狙撃する。銃声一発。途端の叫び。

「やられた！ やられた！ 衛生兵！」とみんな待機の場合より一五メートルぐらい先である。

「敵だ！」とばかりガバツと跳ね起き、戦闘配備につく。負傷した佐藤一等兵を草野一等兵が担いで山を降りた。軽機、弾薬囊は佐藤一等兵が立哨の場所に置いたまま。敵兵が近くで取りに行けない。小銃手の弾を集めて猛射する。敵味方の撃ち合いは漆黒の闇に轟き、溪谷にこだまする。

少数の立哨を大軍をもって密かに包囲した中国軍は、少数とみると俄然攻勢に転ずる。だが敵も慎重だ。孤立無援のわが分哨を四、五人とは思わないだろう。多勢に無勢、わが分哨は突撃されたらひとたまりも無かった。敵の手榴弾はところかまわず周辺に炸裂する。

「駄目だ」と、一瞬死を覚悟する。だが、天の助けか不発弾多し。戦闘最中に古参の鈴木上等兵

が、「分哨が持てないから中隊に応援を頼みに行く」といって分哨長の命令なく山を下ってしまった。最も頼っていた擲弾筒手が戦列から抜けられては心細いかぎり。弾薬少ない軽機一丁だ。小銃手より弾を集めて撃ったが、残り少ない。敵は肉迫の気配。その間五〇メートルか。身の毛もよだつ思いとはまさにこのことである。いよいよ接近戦。私は連続転射で撃つ。敵の銃弾は山頂の一員に集中する。

当たらないのが不思議、敵は日本語で明瞭に「六中隊渡河」と繰り返して言う。「何中隊だ」とこちらで応答する。間髪をいれずに猛射を浴びせる。またも日本語で「機関銃渡河」と繰り返す。日本軍を攪乱する戦法である。軽機の撃ち合いは彼我の判明がつかない。日本軍は分捕った敵のチェッコを中国軍は一一年式を撃つからだ。我々は着剣をして敵の突撃に備える。四家一等兵はうようよする敵を目前にして進むこともできず、た

だ大声で「ヤアー！ ヤアー！」と喊声を上げるのみ。威嚇しようと思ったのか何なのか正気の沙汰ではなかった。中家伍長は「声を出すな」ともいわない。

そのうち四家一等兵は尻に破片が当たったといつて一人で山を下りてしまった。残るは弾薬尽きた軽機を頼りに、中家伍長と若林と初年兵の丸山である。中家伍長は「若林どうする」と声をかけ、ちよつと姿勢を稜線に出した瞬間「やられた！」と一声、一〇メートル離れたところか。丸山が岩石を近づく敵に投げる。敵は手榴弾と思つたのか敵の射撃は一時止んだ。

その機に中家伍長を担いで二〇メートルばかり移動した。分哨位置を見る。敵兵数人が目の我が分哨に群がる。我々に気付かず日本兵の遺留品をさも珍らしげに、水筒を肩に掛ける敵兵、天幕をあふる兵、鉄カブトを手にする兵など敵は次々と姿を増す。

中家伍長は暖かいが、呼吸の有無を確認する暇

はない。援軍到着せず、軽機を担ぎ、小銃を手にして丸山と代わる。必死で中家伍長を担ぎながら山麓に辿り着く。南支の夏草は一メートル伸び、朝露深き明方、六時頃、鈴木中隊長を先頭にした援軍と顔を合わせた。中家伍長の呼吸はすでに無かった。

太陽が昇り始めると、時を同じくして伍長の魂は静かに昇天したのである。

洋谷嶺には高橋分哨が死闘を続けていたことは援軍と顔を合せて初めて知ったのだ。三時間の死闘である。目前の敵以外何も目にも入らなかった。無我夢中とはこうした時なのかと思う。

小隊ごと山に登っていたら損害はさらに多かつたに違いない。大洪水の去ったごとく敵大軍は退去した後、地形を見る。中家分哨の位置は守るに難く、敵側は攻めるに安き地形であった。余りにも素直な三角山の頂点に位置し、背後は崖のような急坂で、山茶花が根刈りされたばかりの本当の

坊主山であった。

攻勢に転じた中国側は未広がり非常になだらかなゆるい傾斜であり、手頃な遮蔽物の山茶花の株まだ刈り払われずにあり、孤立無縁の我が分哨を攻撃するには絶好の攻撃地形であった。今でも思い出す敵大軍との闇夜の死闘であった。

この戦闘で生き残っていると信ずる兵は丸山・草野だが行方知れず、是非知りたい、語りたい、七人中四人は戦死、他界した。

衡陽を通過した頃である。気候・風土が悪く砲弾で倒れる数と同じぐらい病魔におかされる。赤痢・コレラ・マラリア・疲労と重なりどんどん発病する。いわき出身の森甲子七君は妻も子もあつたろう。三十歳過ぎた召集兵で現役兵とは体力の差があり、未教育の召集兵である。彼は重度の赤痢患者であり、発熱で苦しみながら行軍していた。十五分置きに便意を催す。行軍途中に用便しては部隊から残されてしまう。兵は小便を歩

きながらする。歩きながら眠る。

誰かが立ち止まって眠れば後続部隊は皆立ち止まって眠る。立ち止まった兵が何分かして気付き、大急ぎで部隊に追い着く。また誰かやったなと皆歩調を合せて行動する。このようなことは常である。

金城江は貴州省に近い山岳地で小さな盆地が次から次と数多く見られる石灰岩の山である。奇岩奇峯が群をなし、田畑の中に孤立した切り立った山があり、平和時にはこの上ない理想境、別天地である。大陸性気候で日夜の寒暖の差があり、濃霧が発生し三メートル先は見えない。「三里の平野有りて 三日の天気なし」という所である。

湘桂反転作戦・最後の五旗嶺の戦いでは、私は右大腿部軟部に貫通銃創を受ける。担架で軍用トラックの所まで運ばれた。負傷者は荷物の如く積まれるだけ、もう一人もう一人と積まれた。軍公路はでこぼこ路だ。連合軍のB24はひっきりなし

に襲いかかる。地埃は黄塵万丈、天に沖す。乾燥期に入れば半年も雨は降らない灼熱の南支である。負傷兵の傷口には蒼蠅が幼虫を無数に産みつける。数日後に軍医さんに診てもらおうと、蛆虫がコロコロと育ち、傷口を奇麗に掃除をして置く。蛆虫が負傷兵の掃除屋である。

敗戦近く洞庭湖の近くの砂原に傷病兵は集められた。患者は灼熱の砂原で「水をくれ、水をくれ」と叫ぶ。歩くことのできない重患の兵士の中には手榴弾を腹に抱きビュウンという炸裂音と共に即死する。

戦場では、兵はこんな苦闘を続けた。

不運にも戦死されし戦友よ。今は地下での永久の眠りの中で何を考え、何を人々に訴え、何を望んでいるであろう。

私は考える、無意味な戦争であっただろうか。命令一下、兵は生と死の隣合せの日々の戦場である。明日にも知れぬ生命に、今日あった日の喜び

を語りあいながら、遠い故郷に思いを馳せる時、朝露の如き儂き命を一日なりとも長生きしたい、明日の生命の保証なき戦場で散りし戦友に馬鹿な戦争であつたといひ切れるだろうか。

戦争の善、悪は生き残つた者のいう事である。

戦場で散りし友は語らず。黙して語らず。己を捨て国に捧げし戦友を、生き残りし我々は生命の続く限り、語り続けなければならない。また記録しなければならない。後世に伝え知つてもらわねばならない。

祖国日本の平和を願ひ、鮮血にまみれた戦友よ。何といつてよいだろう。地下に眠る戦友に捧ぐ慰めの言葉はまさに筆舌に尽くし難き思いであり、眠る戦友の声無き声を聞き取らねばならないと、常に思うものである。

湘桂作戦

包囲された鉄道工作大隊

香川県 平田雅仁

湘桂作戦は京漢―湘桂鉄道を、さらに仏印まで打通するのだということは、当時の私共鉄道兵の知る所ではありませんでした。株州辺も長沙と同じで食料が少なく、あちこちと食物を探し、農民出身者は大活躍だったが、自分の食料さえ充分に調達できません。一般に移動中の食事は分隊単位、部隊輸送中は兵站給与だが、戦場では食事どころではない時も多かつた。

私は衝陽攻略後、前線へ追求する我々鉄道大隊の状況、特に小部隊が敵の包囲を受け、戦闘力の少ない私達が戦いつつ南下していった戦闘の状況と、兵隊たちの心理などを述べたいと思います。